

第36回日本証券アナリスト大会を終えて

大会実行委員長 増野大 作 CMA
(野村證券)

2021年10月8日に、「ポストコロナ時代を切り拓く企業とアナリストの役割—変革に向けて立ち上がれ日本—」をテーマとした第36回日本証券アナリスト大会を無事に終えることができました。昨年に引き続きオンライン開催ということになりましたが、記念講演とパネル・ディスカッションともに印象深くまた示唆に富む内容であり、皆様に感動をお届けできたのではないかと考えております。加えて、パネル・ディスカッションではライブでのアンケート調査をご紹介します。臨場感のあるセッションとなりました。また、記念講演やパネル・ディスカッションでご登壇いただいた方々からは幅広い観点からアナリストへの応援エールをいただき、アナリストの役割の重要性を改めて認識することができました。ご視聴・ご参加いただいた皆様に改めてお礼申し上げます。またコロナ禍ではありますが、皆様とご家族が安心・安全に過ごされていることをお祈り申し上げます。

昨年のテーマは「自然の脅威に立ち向かう企業とアナリストの役割」でしたが、本年の大会実行委員の議論では、ポストコロナ時代を視野に入れたテーマの検討を行いました。ここでは、各国がコロナ後により良い社会を構築する取り組みを強



増野大会実行委員長

化する中で、日本企業が社会変革をリードできるのではないかとの思いを込めて、「ポストコロナ時代を切り拓く企業」というキーワードを採用しています。また、社会構造が大きく変化する中で、アナリストの役割はますます重要になると考えており、昨年と同様に「アナリストの役割」もテーマとして掲げました。

なお、実行委員の間でも前向きな取り組みをご紹介しますとの意見が多く、サブタイトルを「立ち上がれ日本」とすることで、日本がコロナ克服に取り組み、新たな明るい展望が広がることに言及しております。また、気候変動やESGといったテーマも今後の時代展望には欠かせない要素であ

り、継続的に取り組むべき内容となっております。同時に、日本においてもデジタル化への対応は不可避と考えており、パネル・ディスカッションのテーマを「ポストコロナ時代の構造変革の行方—デジタル化・脱炭素化を展望して—」といたしました。

基調講演の講師やパネリストの方々については様々な候補が挙がりましたが、実行委員の推薦をもとに交渉にあたった事務局の努力もあり、過去の大会に勝るとも劣らない素晴らしいスピーカーの方々にご登壇いただきました。

記念講演Ⅰでは、ソニーグループ株式会社代表執行役会長兼社長CEOの吉田憲一郎氏に、「長期視点での経営とステークホルダー」のテーマでご講演いただくとともに、質問にもお答えいただきました。今回は、吉田氏に長年にわたる財務、経営でのご経験をお話いただく貴重な機会になり、特に企業変革の取り組みを実行する中で長期的視点の重要性を強調されていたのが印象的でした。また、最後にはアナリストへの期待をお話いただき、資本市場に携わるものとして身の引き締まる思いを強く感じました。

記念講演Ⅱでは、早稲田大学大学院経営管理研究科早稲田大学ビジネススクール教授の入山章栄先生に、「世界の経営学から見た日本企業イノベーション創出とアナリストへの視座」をテーマにご講演いただきました。ここでは、企業のイノベーションへの取り組みに対してどのようにアナリストが向き合うべきかについて、幅広い観点からアナリストへの期待をお話しいただいております。

パネル・ディスカッションは、「ポストコロナ時代の構造変革の行方—デジタル化・脱炭素化を展望して—」をテーマにして1時間半にわたり活発な議論が展開されました。弁護士ドットコム株

式会社代表取締役社長の内田陽介氏からは専門家をもっと身近に、とする経営理念と事業の取り組みが紹介され、東京製鐵株式会社代表取締役社長の西本利一氏には「脱炭素・DX時代の電炉業」をテーマに同社の取り組みをお話しいただきました。また、SMBC日興証券株式会社株式調査部シニアアナリストの山口敦氏には、アナリストの観点から「デジタル化・脱炭素化社会におけるアナリストの役割」をテーマに日本企業をみる上で考えるべきこと、日本企業として考えるべきことについて様々な示唆が示されました。司会の三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社の吉高まり氏には、議論を先導していただくとともに「グリーンリカバリー政策」についてコメントをいただいております。

ディスカッションパートでは、先端的なデジタル化や脱炭素化の取り組みが先行例として取り上げられる一方で、視聴者アンケートでは日本ではDX化の推進が待ったなしの状況にあることが示されており、スピード感を持って企業改革に取り組む必要があることを改めて実感させられました。このため、デジタル化や脱炭素化は継続的なテーマとして今後の大会でも議論の対象になるのではないかと考えております。

また、最後には証券アナリストジャーナル賞とディスクロージャー優良企業を紹介しております。昨年同様に今年も懇親パーティーは実施できませんでしたが、来年は皆様と対面で日本証券アナリスト大会を開催ができることを願っています。

最後になりますが、ご多忙中ご登壇いただいた記念講演講師の皆様、パネリストの皆様、前例のない中で入念な準備をいただいた大会事務局および実行委員の諸氏には、この誌面を借りて深く感謝申し上げます。